

# 現代日本語要説

—東京語・標準語・日本語教育—

和久井生一 著

朝 倉 書 店

# 現代日本語要説

—東京語・標準語・日本語教育—

和久井生一 著



朝倉書店

## 著者略歴

わくいせい  
和久井生一

1923年 神奈川県に生まれる  
1971年 法政大学文学部卒業  
現在 拓殖大学商学部教授(専任)  
法政大学文学部講師(兼任)  
著書 日本語教育事典(共著)  
日本語学要説(共著)  
外国人のための日本語入門

## 現代日本語要説

—東京語・標準語・日本語教育—

定価 2266 円(本体 2200 円)

1989年10月25日 初版第1刷

1990年6月10日 第2刷

著者 和久井生一

発行者 朝倉邦造

発行所 株式会社 朝倉書店

東京都新宿区新小川町6-29

郵便番号 162

電話 03(260)0141

FAX 03(260)0180

〈検印省略〉

© 1989 〈無断複写・転載を禁ず〉

中央印刷・関口製本

ISBN 4-254-51015-2 C 3081

Printed in Japan

## 序

本書は、日本語・国語学を学ぶ人びとのためにまとめたものである。大学・短大のテキスト・参考書としてはもちろん、一般社会人の教養書としても面白くて、勉強しやすい本になるように心がけ、執筆した。

また、日本語を勉強する外国人が、一步深く日本語を味わえるようにと、心がけた。さらに、日本語と日本語教授法および言語学を昭和三六（一九六一）年から、大学において北米・南米・アジア・中近東・アフリカ・オセアニア等の留学生やビジネスマンに教えてきた経験を生かして、やさしくて、興味の持てる本になるように心がけた。

近い過去の日本語が、実際にどのように使われたのか。そうした日本語が、現代の日本語に成長した姿や、使われ方は、どうであろうか。気がついたら、いつのまにか、小さい幼稚園の子から寝たきりのお年寄まで、みんなが電話で話をする今日この頃、そんな現代の日本語も勉強になるので、この本では、そのようなことも考えてみることにした。

多方面で複雑に使用されている日本語なので、この本にすべてを収めることは不可能であり、不備な点はお許しいただきたい。しかし、今まで教えてきた経験から、外国人の日本語研究者や日本人学生が、熱心に求めた具体例もできるだけ入れるように心がけた。

この本を書くためには、先輩諸学者の研究調査を参考にしたが、この場を借りて厚く御礼申しあげると同時に、読者の皆さんには巻末にかかげたそれらの文献を、ぜひ参照していただきたい。

平成元年十月二日

# 目次

一	東京語と標準語と日本語教育	一
第一章	東京語と標準語	二
一	東京語へのあゆみ	二
二	標準語	一八
第二章	日本語教育の芽生えと進展	二五
第三章	東京語と東部方言	三一
一	方言区画	三一
二	関東方言の音声についての特色	三三
第四章	東京語の都会性——首都と公用語——	三五
第五章	東京語の移り変わり	三八

一	明治期の東京語	三八
二	大正期の東京語	五九
二	東京語の母体としての江戸のことば	六五
第六章	江戸ことば	六六
一	町人のことばと江戸ことば	六六
二	武家のことばと江戸ことば	七六
第七章	江戸ことばの音韻と語法の特徴	九一
一	江戸ことばの音韻の特徴	九一
二	江戸ことばの語法の特徴	一〇一
第八章	江戸ことばから東京語へ	一二三
一	蘭学からの影響	一二三
二	欧米語からの影響	一三九
三	東京語の新しい見方	一四二
	あとがき	一六三

目次

iv

参考文献

.....

一六五

索引

.....

一七九

一 東京語と標準語と日本語教育



# 第一章 東京語と標準語

## 一 東京語へのあゆみ

### (一) 東京語への歩み(その一)

江戸が東京と正式に改称されたのは、慶応四(一八六八)年七月一七日の詔書「江戸ハ東国第一ノ大鎮、四方輻輳ノ地、宜シク新臨以テ其政ヲ視ルベシ、因テ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン」によるものである。同じ明治元年五月に「江戸府」が設立され、同年九月二日に「東京府」となった。同二年二月二四日に、京都から東京へ太政官を移すとの布告があり、政府機関は東京へ正式に移転した。東京が政治、経済の中心地になって活動を開始すると、公用、教育、一般社会等に関わることばは、「東京中心に使用されていることば」が有力となった。特に明治時代は教育を重んじていたので、東京語を日本の共通語とする標準語への関心が高まり、東京以外の県においても同様であった。東京を中心にとってきた新しい時代の情報や中央から波及している文化を早く理解する必要を強く感じたのは、東京から遠く離れた沖繩等の地域に多かったのである。

沖繩には、一四二九年に成立し、四五〇年あまり続いた琉球王国があり、標準語として首里語が用いられてきた。明治維新後の統一国家の政策は、教育行政の一つとして、ことばの教育に大きな影響を与えてきた。

明治四(一八七二)年に中央では廢藩置県が行われ、その後八年おくれて一二年に、沖繩では置県制度が実施された。

中央に対する新教育は、明治一三（一八八〇）年に、中央語の読み書きのできる教員を速成で養成するため「会話伝習所」を設置した。同年発行された教科書に『沖繩對話』（沖繩県庁編）という会話の本がある。その中に、「東京ノ言葉ハ廣ク通ジマスカ。何縣ニテモ大概通ジマス」とあり、共通語、標準語として東京語が遠い地域の教育者、識者にとって、関心の強かったことがわかる。この『沖繩對話』は、沖繩の一般の人々の標準語教育に、明治初期の東京語を適切に捉えているものとして重要な役割を果たしたと思う。

『沖繩對話』（明治一三・一八八〇年）は「沖繩のことば」と「東京のことば」が表されており、沖繩ことばを勉強する人にとっては、当時の状況を知る上に非常に貴重なものである。また東京語の研究者にとっては、明治初期の東京のことばがどのように使われていたかがよくわかるのである。当時の東京語と、現代の東京語を比べてみると次のようになる。特に異なった読み方の例をあげる。

A 当時使われた漢字      B 沖繩語      C 当時の東京語      D 現在の東京語

A 晴天      B シーテン      C ハレタテン      D 晴（はれ）

A 曇天      B クムイデンチ      C クモリゾラ      D 曇（くもり）

A 望月      B ジフグヤ      C モチヅキ      D 満月（まんげつ）

A 弦月      B ハンブンヅチユウ      C ユミハリヅキ      D 三日月（みかづき）

A 新月      B ミカヅチ      C ミカヅキ      D 三日月（みかづき）

A 陸      B リク      C クガ      D 陸（りく）

A 燥地      B カハチツチ      C カハキチ      D 乾燥した土地（かんそうしたとち）

- A 塹 B クムイ C ホリ D (現在は使わない)
- A 涪 B ミヅタマイ C ミヅタマリ D (現在は使わない)
- A 海灣 B イリー C イリウミ D 湾(わん)
- A 進潮 B ミチシユ C サシシホ D 上げ潮(あげしお)
- A 黎明 B ストミテ C シノノメ D あげがた
- A 祖父 B タンメー C ゼヂ D 祖父(そふ)
- A 祖母 B ムメー C ババ D 祖母(そぼ)
- A 姉 B スイーザラナイ C ア子(子は「ネ」と呼び、明治時代にはよく用いられた) D 姉(あね)
- A 養子 B ツカ子ーングワ C イヤウシ D 養子(ようし)
- A 下女 B キナグンサ(キはウイ) C ゲヂョ D おてっだいさん
- A 書肆 B シユムツヤー C ホンヤ D 本屋・書店(ほんや、しょてん)
- A 漆工 B スイムヌー C ヌンヤ D 漆職人(うるししょくにん)
- A 厩房 B シチンジユ C セツチン D トイレ、お手洗
- A 火吹筒 B ヒーフチ C ヒフキダケ D 火吹竹(ひふきだけ)
- A 引火奴 B ツキダキ C ツケギ D (この字は現在はない)
- A 襤衣 B ワタイリ C ワタイレ D 綿衣(わたいれ)
- A 午餐 B ヒルマ C ヒルメシ D 昼の食事(ひるのしょくじ)
- A 馬 B ムマ C ムマ D 馬(うま)

A 羅葡 B データニ C ダイコン D 大根(だいこん)

次の会話は現在の東京語に比べて非常に丁寧なことを使っていることがわかる。現代の東京語と比べてみる。

。今日ハ誠ニ長閑ナ天気デゴザリマス。左様デゴザリマス、好キ天気ニナリマシタ。

「今日はとてもいい天気です。そうですね。いい天気になりました」

。貴方、御隙ナレバ、花見ハ如何デゴザリマス。ドウカ御同伴ヲ願ヒマシヤウ。

「もしおひまでしたら、お花見にいきませんか。どうぞ御一緒にお願ひいたします」

。今日ハ、一層、暑サガ増シマシタ。先ヅ、上衣ヲ、オ脱ナサレマセヌカ。

アリガトウゴザリマス。貴方も袴ヲ御トリナサレマセ。

ソレデハ御免ヲ被リマシヤウ。

「今日はとても暑くなりました。どうぞ上衣をお脱ぎください」

「ありがとうございます。あなたも袴をおとりください」

「それでは失礼いたします」

明治時代には、外出の時に袴をはき、家に帰って来て、くつろぐときは袴を脱ぐという習慣があったので、現在のズボンを脱ぐという感じとは少し異なる。

。何時ナリトモ、御暇ノ節ハ、御光來下サレマセ。

「いつでも、おひまの時は、おいでください」

。今晚ノ風ハ随分寒ウゴザリマス。

左様デゴザリマス。先刻ヨリ少シ雪ガ降りテオリマス。

「今夜の風は、とても寒いですね」

「そうですね。さっきから、雪が少し降っています」

。貴方ノ御時計ハ、何時デアリマスカ。私ノ時計ハ、八時デゴザリマス。

「あなたの時計は、何時ですか」「私の時計は八時です」

。貴方ハ、東京ノ言葉デ、御話ガ出来マスカ。

ナカナカヨクハ話セマセヌ。

誰レニ御習ヒナサレマシタ。

此頃、傳習所デ習フテヲリマス。

「あなたは東京語で話すことができますか」

「上手に話すことはできません」

「だれに教わりましたか」

「最近、伝習所で習っています」

。貴方ハ、小学校へ幾年程御越ニナリマシタカ。

「あなたは小学校へ何年行きましたか」

。今日ハ先生ノ宅へ質問ニ参リマスガ貴方ハ御出ナサレマセヌカ。

「今日は先生のところへ聞きに行きますが、あなたはいらっしゃいますか」

。今日ハ御尋子申上度キ事ガゴザリマシテ上リマシタガ、御忙クハゴザリマセヌカ。

「お聞きしたいことがあって来ましたが、お忙しくはないでしょうか」

。電気ノ起ル譯ヲ聞タフゴザリマス。ソレハ餘程時間ガカカリマシヤウ。

「電気の起る訳を伺いたいです。だいぶ時間がかかりますか」

。田畑ノ作り物ガ見事デゴザリマスガ當年ハ豊作デゴザリマシヤウ。

「田畑の作物がよくできましたから、今年は豊作でしょう」

。貴方ノ畑ト、私ノ畑トハ、地味ニ格別ノ違ハアルマイルト思ヒマスガ毎年貴方ノ収穫ガ多ヒ様デハアリマセヌカ。

「あなたの畑と私の畑は、土地に特別の違いがあるとは思いませんが、毎年あなたの畑の収穫が多いようですね」

。當年ノ砂糖ハドレ位御買込ニナリマシタ。

「今年は砂糖をどの位お買いになりましたか」

。貴方ハ先頃宮古島ヨリ澤山反布ヲ御仕入ニナリマシタト承リマシタガ如何程御買込ニナリマシタカ。

「あなたは先日宮古島から、たくさん布地を仕入れたと聞きましたが、どの位お買いになりましたか」

。今日ハ久シ振リノ休暇ヲ得マシタカラ遊ビニ参ヘリマスガ貴方モ御出ナサレマセヌカ。

「今日は久しぶりに休みがとれましたから、遊びに行きますが、あなたもいらっしやいませんか」

。今日ノ潮ハ何時頃参リマスカ。

八時頃ニハ大抵満潮デゴザリマシヤウ。

「今日の上げ潮は何時頃ですか」

「八時頃、満潮になるでしょう」

一 東京語へのあゆみ

。明日ハ何カ祭禮デモゴザリマスカ。

ハイ、明日ハ格別ノ祝日デゴザリマス。

「明日は何のお祝いですか」

「はい、明日は特別の祝日です」

。末タ日モ高クゴザリマスガ博物館ヘ行キマシヤウ。

ソレハ至極ヨロシフゴザリマス。

「まだ時間がありますから、博物館へ行きましょう」

「それは、たいへんいいですね」

。東京ヘノ御出立ハ何日デゴザリマスカ。

末タ決定ハ致サレマセヌガ何レ五六日ノ内デゴザリマシヤウ。

「東京へいつおたちになりますか」

「まだ決まっていますませんが、五、六日中に出かけます」

。近々遠方ヘ御越シニナルト承リマシタガ、何處ヘ御出ニナリマスカ。

沖繩迄参ル積リデゴザリマス。

「近の中に、遠くへお出かけになると伺いましたが、どちらへいらっしゃるのですか」

「沖縄へ行くつもりです」

。第百五十貳国立銀行ヘハ是カラ参リマシタラ宜シフゴザリマスカ。

「第百五十二国立銀行は、ここから行った方がいいのですか」

。先夜ハ不慮ノ御災難デ、サソ御不自由デゴザリマシヤウ。

「昨晚は思いがけないことで、さぞ御心配だったでしょう」

。昨日ハ、毎度御使ヲ下サレマシテ有難フゴザリマシタ。折角御待チ申上マシタガ、御餘義ナキ御障ノ御様子デ誠に残念デゴザリマシタ。

「昨日は、何度もお知らせ頂き、ありがとうございます。お待ちしておりましたが、御用でいらっしゃれず、とても残念でした」

以上のように、沖繩で行われた東京のことばを指す『沖繩對話』を通して、当時の東京のことばを、確かめることが出来る。

## (二) 東京語へのあゆみ(その二)

福沢諭吉の『福翁自伝』(明治三三：一八九九年)の中から、ことばの移り変わりの例を見る。

### (例の一)

其事を又母が私に話して、アノ時阿父さんは何故坊主にすると仰ッしゃったか合点が行かぬが、今御存命なればお前は寺の坊様になっている筈ぢやと、何かの話の端には母が爾う申して居ましたが、私が成年の後その父の言葉を推察するに、中津は、封建制度でチャント物を箱の中に詰めたやうに秩序が立て居て、何百年経ても一寸とも動かぬと云ふ有様、家老の家に生れた者は家老になり、足輕の家に生れた者は足輕になり、先祖代々、家老は家老、足輕は足輕、其間に挟まって居る者も同様、何年経ても一寸も変化というものがない。ソコデ私の父の身になって考へて見れば、到底どんな事をしたって名を成すことは出来ない世間を見れば茲に坊主と云ふものが一つある。何



でもない魚屋の息子が大僧正になったと云ふやうな者が幾人もある話、それゆへに父が私を坊主にするに云つたのは、其意味であらうと推察したことに間違ひなからう。

(例の二)

如斯なことを思へば、父の生涯、四十五年の其間、封建制度に束縛せられて何事も出来ず、空しく不平を呑んで世を去りたるこそ遺憾なれ。又初生児の行末を謀り、之を坊主にしても名を成さしめんとまでに決心したる其心中の苦しさ、其愛情の深き、私は毎度此事を思出し、封建の門閥制度を憤ると共に、亡父の心事を察して独り泣くことがあります。私の為に門閥制度は親の敵で御座る。

このように、福沢諭吉という代表的な人物を通して、「御座る」という武士ことばを使っているかと思うと、くだだけたはなしことばと両方を使っていたのである。幕末から明治期にかけては武士のことばを使い、また、やがて東京語となる口語調を使うという和漢混合のことばの時代であった。

明治三九（一九〇六）年以後になると、夏目漱石などの東京語による会話によって書かれた小説が、多く現れた。その中で、東京弁を使う主人公の小説『坊っちゃん』や、東京人の生活語を話す『吾輩は猫である』など新聞小説を通して、急速に東京語が全国的に普及した。

(三) 東京語へのあゆみ(その三)

大正期に入ると、明治四十数年間の経験と努力の結果、東京語の捉え方も安定してきた。

東京は明治に比べて、ますます政治、教育の中心になる傾向を示してきた。地方の青年が東京で学び働く時に、標準語としての東京語の習得が重要なことになってきた。上京した青年達にとって、自分の意志を周囲に伝え、それにより友人